魔王と蝶のラプソディ

森永パピ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔王と蝶のラプソディ

【Ｎコード】
Ｎ３１３２Ｙ

【作者名】
森永パピ子

【あらすじ】
小田信之は幼い頃から不可解な夢を見る。今までと違う夢を見た翌日、信之の通う仙石原学園に斉藤美姫という美少女が編入してきた。一目見て美姫を気に入った信之はその場で『俺のものにする』と宣言したが、美姫は断固拒否する。

※転生現代モノで信長様×濃姫様をやりたかっただけの自己満足もの。登場人物はそれっぽい名前にしていますが史実には沿いませんのでご了承下さい。

出会いは必然！（前書き）

うっかり連載レベル……m（；；）m

出会いは必然！

切れや斬れや。斬り捨てろ。
我を裏切る者ならば、死して嘆き悔やむがよい。
覇道を邪魔する奴ならば、死して嘆き悔やむがよい。
殖やせや増やせ。屍増やせ。
積めや上げろや、積み上げろ。憎しみ悲しみ積み上げろ。
死霊の城を我が為に。
蝶は魔王を愛したが、魔王は愛を知らぬまま。
死ねや歌えや不如帰。舞えや散れや不如帰。
帰れや蝶よ。魔王の元に。

複数の幼い笑い声。それは無邪気に侮蔑を愉しんでいる。
その中央にうずくまる少年は両手で目隠しをしている。
彼を囲むのは、狐の面を着けた子供達。青白く光る地面が瞼に薄く映えた。
単調な囃し歌が耳に纏わりつく。

ああ、嗚呼、もう、気分が悪い。
頭が割れそうだ。
血は赤くない。血は、赤黒い。
吐きそうだ。吐きそうだ。
この臭い。生臭い。生臭い！！
少年の叫びも虚しく、子供らは嘲笑しながら再び囃し歌を口ずさむ。

加虐の限りを尽くしても天下平定は遠退くばかり。
飽いた飽いたや殺戮飽いた。魔王は頬杖溜息ばかり。
楯突く輩は誰彼厭わず坊主も武将も皆殺し。

いずれは誰かが討ちやらぬ。魔王の寝首を掻きやらぬ。
次はお前じゃ。次はお前じゃ。魔王の首掻け。
次はお前じゃ。次はお前じゃ。明日は我が身が露となる。
次はお前じゃ。次はお前じゃ。怯えて暮らせ。

声にならない喘ぎを繰り返し、耳を塞ごうと鼻をつまもうと息を殺そうと、歌は聞こえ、血が臭い、子供の気配は近くなる。見たこともない血飛沫や聞いたこともない断末魔、鉄錆の臭いが五感に障る。

嗚呼！

助けを求めるように頭を抱えのけ反った。

――小田信之が目を覚ますと、いつもと変わらない自室のベッドの上だった。

阿保のように浅い呼吸を繰り返しながら、周りを見回した。

信之がものごころついた時から見る夢。闇の中で狐面を被った絣着物の子供に囲まれ、真ん中で目隠しをしながら嘲笑と囃し歌に苛まれる。辺りは闇。何故か手を離したり目を開く事が出来なかった。

目を閉じたまま、頭の中で周りを見渡しているという不可解な夢。この夢をみた朝は決まって頭痛に悩まされた。カーテンの裾を指でつまんで窓を覗き込むと、まだ夜闇が淀んでいた。鈍痛の続く頭を抱え、溜息をつく。

「一体、なんだってんだよ……！」

やる瀬ない舌打ちを一つ。それも虚しく再び自棄気味に横たわると間もなく緩慢な眠気にたゆたう。抗う術なくみを任せていると、遠くから鈴の音が聞こえてきた。

始めは間隔をあけて遠くから。次第に音は大きくなり、明瞭に聞こえる。鼻孔に様々な甘い香がかすめ、複数の女の矯笑が混じってくる。見えない白い手が信之の頬を滑る。胸の中がスッと冷たくなる。決して恐怖などではなく、信之は女たちの気配を弄ぶように手

を伸ばした。

こやつらは所詮、家畜。我が子を成し、その身の安泰を謀り貪るだけの家畜。

それでいい。

明日とも知れぬ我が身なら共にあるのは『　』のみ。

生涯我が女は『　』のみ。

妖艶な濃紫色の蝶が不可思議な光の粉を振り撒きながら辺りを飛び回る。

ひらひらと優雅な舞いに信之はゆっくりと微笑んだ。

蝶の夢は初めてみた。

再び目覚めた時、窓は朝日で明るく、頭痛も失せていた。

いつもの朝のはずなのに、信之の胸中は妙に落ち着かない。

身仕度を整え、コーヒーと苺ジャムバターのトーストと半熟ゆで卵の朝食を済ませた。

小田信之、十七歳。父親は代々続く製薬会社を継いでおり、母親は某政治家の孫という金銭的には恵まれた家庭環境に生まれ、望み通り高校入学とともに一人暮らしをさせて貰っている。

それなりの家柄の子息子女の為の私立の高校に通い、いずれは有名国立大学に進学し、官僚になることを目指している。家業は勝手に妹の市子かその婿にでも継がせるつもりでいる。親の作ってきた道筋を辿ることに抵抗があった。誰にも干渉されない環境を整える為に親を利用している自覚はある。

この一人暮らしもその一環だ。一流の学校に入学したのは親の体裁のためではない。己の道の為だ。高校と大学の縦横繋がりが将来役立つことを見越して進学してきた。

いつの間にか文武両道かつ狡猾な者が自ずと彼の周りに集まって

きた。友人は大事に扱ったが、信之を陥れようとする者は徹底的な知略と暴力で捩じ伏せてきた。信之はお坊ちゃん学校と揶揄されてきた千石原学園始まって以来の問題児でもあった。

「それでは転校生を紹介する」
朝のＨＲでいつものように本を読んでいると、教壇に立っていた担任教師の平手昌男は咎めもしないまま引き戸を開けて生徒を招き入れた。信之は生徒のざわめきをＢＧＭに顔も上げず読書に耽っていた。
「おい！　小田ちん！　読書してる場合じゃねえぞ！　世の中にはもっと大事なものがある！　書を捨てろ！　前を向け！！」
前席に座っていた前田利郎が文庫本を取り上げて、黒板の方を何度も指差した。
「なんだよ、トシ」
眉間にシワを寄せて信之は利郎とその指差す方を見た。
「三野高校から編入してきた斎藤美姫です。よろしくお願いします」
深く頭を下げた反動で結い紐が解け、艶やかな黒髪が空中に舞うように垂れ下がった。
「貞子じゃねーか」
信之は利郎から文庫本を取り返し、鼻を鳴らした。
「誰？　今、貞子とほざいた馬鹿は？」
垂れ下がった髪を払い上げ、斎藤美姫が教室を睨み据えた。
切れ長の眼は濃い睫毛に縁取られ、左の目元のほくろが色っぽい。高校二年生にしてはやけに妖艶な顔立ちをしている。
瞬時に教室に氷河期が訪れ、誰もが戦慄した。なにも知らないとはいえ、実質上学園を仕切っている信之に盾突いたのだから。皆の狼狽を他所に信之は「ほう」と呟いた。
「俺だ」
信之は文庫本を持ったままの手をあげてにやりと笑った。

美姫の鋭い視線が己を捕らえた瞬間、信之は瞠目した。
「……最低」
彼女は信之を凝視している。信之は妖艶な顔(かんばせ)を怪訝に見つめ返し、首を傾げた。美しさに見惚れるだけではない。目が合った瞬間にこめかみの辺りに電流が走ったように感じた。
「初対面の相手に馬鹿とは随分な挨拶だな」
「あら。あなたこそ初対面の相手に貞子だなんて結構なご挨拶じゃない？」
そーだそーだ。別嬪さんに謝れ！　と利郎が野次を飛ばし、いくらか教室の空気が和む。
「悪かった。井戸の中の妖怪にするにはもったいないくらいあんた綺麗だ」
素直に思ったことを告げると、美姫が顔を真っ赤に染めた。どよめきが密かに起こる。平手は信之と美姫以外を宥めると、咳払いをした。
「斉藤は小田の隣の席に座るように」
「俺の隣だ。運命だな、俺たち」
信之はからかうように声を立てて笑った。
「平手先生。もっとマシな席はないんですか」
美姫は責めるような口調で初老の教師に向き直る。
「あいにく空きはあそこだけなんだよ」
平手は気弱げに曖昧な微笑を浮かべた。美姫は持っていた鞄の取っ手を握りしめると、わかりましたと言い捨て、大股で信之の隣の席に向った。
机に鞄を叩きつけ、信之を睨みつける。
「ちょっと褒めれば女が簡単に機嫌を直すだなんて思わないでね。小田くん」
「勉強になるよ。斉藤。いや、美姫か。これからよろしくな美姫」
「馴れ馴れしく名前呼ばないでください」
「あんたも呼べばいい。そうしたらお互い様だ」

「結構です」
「教科書見せてやるよ。ノートもな。三野高からじゃウチの範囲に間に合わないぜ」
「馬鹿にしないで！」
「最初に馬鹿って言ったのそっちだろ？」
ぐっと唇を尖らせ、美姫は信之を睨む。
「俺のでよけりゃ見せるよ」
利郎が振り向いて美姫に笑いかけた。
「駄目だ。トシ。この女は俺のものにする」
「はあ？！　勝手に決めないで！」
美姫は机を叩いて怒鳴った。
「怒ったお前もいいな。どうしたって綺麗だ」
「馬鹿じゃないの？！」
顔を真っ赤にして、怒っているのか照れているのかわからない美姫をみて、信之は高らかに笑った。
「馬鹿の言うことをいちいち真に受けなければいいだろう」
「信じられない！　なんなのあなた！」
「俺は俺だ」
「気に食わないから私をからかってやろうって思っているんでしょうけど、お生憎様。私は絶対あなたなんかに屈したりしないわ。あなたのものになんてなってやるもんですか！」
「そう気負うなよ。屈さなくていいから俺に惚れろ」
「絶対、嫌！」
信之が美姫を睨みつける。美姫は真正面からその眼光を睨み返す。
「いい目だ。そそる」
「汚らわしい目で私を見ないで頂戴。脅されたって何されたって私は絶対あなたに負けない」
「なんでそんなに敵意むき出しなんだよ。俺、そんなに癇に障るか？」
「そうね。なんだかあなたを見てると不快になるわ」

「俺はお前を見てると気分がいい」
にやりと笑うと、美姫はつんと顔を逸らした。
「あなたの気分なんて良くしたくもない」
「してもらわなくとも結構だ。勝手に良くなる」
ＨＲ終了のチャイムが鳴るまで二人の言い争いは続いた。美姫がつっかかり、それを受け流すように褒めそやす。初めは固唾を呑んで見守っていた周囲も、だんだん緊張を解いて連絡事項に耳を傾けた。
誰もが信之が進んで他人に構っているのを初めて見た。担任である平手も斉藤美姫さえいれば学園は平穏かもしれないと思っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3132y/

魔王と蝶のラプソディ

2011年11月7日11時23分発行